

食物嫌悪の形成・維持に関する心理学的研究 (1)

○富田 拓郎

早稲田大学大学院人間科学研究科

小泉 英二

早稲田大学人間科学部

【はじめに】

現代人は多様な食環境に取り囲まれている。食物そのものが豊富になった反面で、摂食障害を始めとする様々な食行動上の問題も起きており、食物嫌悪もその一つと考えられる。

生理学的・栄養学的には全く問題にされない食物嫌悪だが(庄司, 1984), 長期に亘った場合は病気との関連も示唆されている(楠, 1982)。さらに, 子どもの摂食習慣は栄養状態, 成長, 健康の各側面に亘って影響を及ぼしていくが, 食物嫌悪の形成を解明することはこれらの各側面に対しても応用できる。また, 幼少期の摂食制御のメカニズムがどのように発達していくのかについても, より一層の理解ができるようになる(Birch, 1987)。

【目的】

本研究では食物嫌悪の定義を以下のように — 特定の食物に対し, 永続的な嫌悪感情や抵抗感, 拒否感を示すこと。ただし, 摂食障害の症状として現われる食物拒否はこれに含めない — 定めた上で, 学生を対象とした調査を行い, その発生と消去について検討した。

本発表ではその一部を報告する。

【方法】

調査項目: 食物嫌悪の発生時期, 嫌悪する食物の種類, 嫌悪の理由, 嫌悪が消去した場合はその時期と理由, 及び種々の食物の摂取頻度と好み。

(なお, 集計の都合上, 嫌悪の理由については別の機会に発表を譲る)

調査対象と方法: 首都圏近郊の学生 243人(男子102人, 女子141人, 平均年齢 男子20.6才(SD 1.79), 女子20.6才(SD 1.69), 全体20.6才(SD 1.73))に対し, 質問紙調査を実施した。

調査時期: 1993年 9月下旬~10月上旬

【結果と考察】

(1) 食物嫌悪の発生率

現在嫌悪のある人(現在群)は125人(男子 47人, 女子 78人)で全体の51.4%(同 46.1%, 55.3%), 過去に嫌悪があり現在無い人(過去群)は63人(同 28人, 35人)で全体の25.9%(同 27.5%, 24.8%), 過去にも現在にも無い人(なし群)は55人(同 27人, 28人)で全体の22.6%(同 26.5%, 19.9%)だった。性別(男女)×嫌悪の有無

で χ^2 独立性検定を行なった結果, 両者は独立であった。

(2) 食物嫌悪の発生時期

12才以前に嫌悪を起こしていたのは, 現在群の84.2%(101人), 過去群の98.3%(58人)だった。これに対し13才以後に嫌悪を起こしたのは前者が15.8%(19人), 後者が1.7%(1人)であった。また, これらをクロス集計し χ^2 検定を行なった結果, 両者は非独立であった(Fisherの直接確率法, $p < .01$)。

13才以後に嫌悪が起きると, 20才前後までは維持されやすいと言えよう。

なお, 未回答や回答不能(「わからない」など)が現在群に5人, 過去群に4人いた。

(表) 12才以前の発生時期の内訳

	6才以前	7~12才	計 (人)
現在	64	37	101
過去	28	30	58
計	92	67	159

($\chi^2 = 3.44$, $p < .10$)

(3) 嫌悪が消去する時期(過去群のみ)

過去群の嫌悪が消去した時期について, 12才以前と13才以後に分けて集計した(未回答1人)。

12才以前は15人(28.6%), 13才以後は47人(71.4%)となった。臨界比検定を行なった結果, 両者に有意差が見られた($p < .001$)。嫌悪が消去されやすいのは, 主に13才以後だと考えられる。

(4) 家族の嫌悪有無との関係

家族の嫌悪の有無×嫌悪の有無(現在, 過去, なし)でクロス集計を行なった。 $\chi^2 = 12.5$, $p < .01$ で両者の非独立性が明らかになった。具体的には, 現在群に家族の嫌悪が多く見られ, 過去群やなし群には少なかった。

【今後の課題】

本調査は, 対象者の記憶に基づくものであり, データの安定性について, さらに吟味する必要がある。今後は, 縦断的な調査等も併用して, より精度の高い方法を開発していく必要があるだろう。